

「どうしたい、坊主！」

見上げると、淡い水色が色あせた半袖シャツ姿の機関士さんが運転台から身を乗り出してどんぐりのような目で見つめていた。昼下りの黄色みを帯びまじろむ空気に輝く、短く借り上げた白髪が剣山のようにそして今まで見たこともない、赤茶けて錆びついたコンテナに黒々とした有蓋貨車が連なる貨物列車がまだまだ低い陽に燻されて川を背に佇んでいる……

「今ん汽車、乗り遅れたが？ 次は四時半過ぎまでねえぞ、快速だあ」

半べそのところを射抜くような目でぞき込まれると、僕はますます胸がつかえ、家待つ母を思いどつと涙があふれた。はじめあきれ顔で見ていた機関士さんだが、はっとして急に眼の色を変えた

「坊主、どっちゃ帰るんだ？ あれが、三代じゃねが、江花が勢至堂が……！」

僕はこの春、山を下りた長沼の町の小学校に通い始めた。学校見学の時、両親は勢至堂の村落からでは遠かろうと心配したが、校長先生は「朝は七時過ぎに着く汽車があるでしょう、午後の授業は二時半には終わりますから、二時半過ぎの汽車で帰れますね。坊や、汽車通学なんて贅沢だぞう！ みんなに自慢してやれえ」と言つて豪快に笑つた。父は「おれも朝市場行くに早いから送つてやれんしなあ」と言つし、僕も、一人で里を離れる不安や寂しさよりも、山を降りて汽車に乗つて町の小学校に通う小さな小さな僕やこの人の悦びが勝るようになっていったのだつた

でもことは簡単ではなかつたんだ。授業は判で押したようにきつかり二時半に終わるのだけれど、必ずその後の終礼が延びる。隣の席の和也は毎朝遅刻して最後に先生からお小言を言われていたし、教頭先生の娘で学級委員長の上島愛子は毎日終礼の時刻になると給食を食べ残したクラスメートの名前を全部先生に告げ口しなければ気が済まないのだつた。やつと最後の「礼」を終わると僕はそのまま一人弾丸のように教室を飛び出し、診療所の角に車が来ていることを確認して町のおじさん達が難しい顔をして立ち話をしている商工会の前を走りすぎる。まるまんスターの前を買ひ物の自転車避けながら息せき切つて通り過ぎる頃、前方遠く、江花川を背にした長沼の駅に、草色の汽車が入つて来るのが見えるのだ。最後のふんばり！ と自分言ひ聞かせてラストスパートをかけ駅に飛び込む。駅員さんが窓口から覗いて「危ないぞー！」と叫んでいるのも聞かぬか、跨線橋を走つて渡つて車掌の笛の音と同時に下り列車の車内に転がり込み、閉まるドアの空気が抜ける音を背にして安堵の息、まさかの通学が毎

日毎日これほどスリルあるものだったなんて……！

でもどうとうこの日が来てしまった。今日はまるまんスターでラストスパートをかけようとした瞬間、郵便局前の通りを車が何台か横断して来たんだ。おっと！ と止まった刹那、遠くでピー——つと笛の音が鳴り、車列が過ぎ去つた先の視界の彼方、小さな小さな改札口のそのまた向こうに、流れゆく気動車の四角い窓、窓、窓……

力なく改札を入り立ち尽くしていると、反対側の上り列車もドアが閉まり、長沼の小さな駅を出て行った。どうしよう……勢至堂に停まる下り列車は一日たったの三本。午後二時三十八分を逃したら次は九時過ぎまで来ない！

「どっちゃ帰るんだ？ あ？ 勢至堂が？」

どんぐり目の機関士さんが貨物列車の機関車の窓から乗り出しますます目を大きくして叫んでいる。そうだ、僕はこれまで、この時刻に長沼の駅に貨物列車が停まっているなんて気にしたこともなかつた。改札を入つた隣のホームに互い違いに停まる上下の普通列車、その下りに飛び乗るのが精いっぱい、その向こうにこんなに長い貨物列車がいたなんて……！

「せ、勢至堂です！ 何が何だか分からないが叫び返す

「あんちゃ、だったらこー、おれん汽車乗つてけえ！ こつちや、こつちや、跨線橋渡れえ！」

急に会津の言葉が混じる機関士さんにせかされ、跨線橋を渡り機関車の前へ。ゴングと地鳴りのようなエンジン音をあげ油臭い煙をムンムン吐き上げるディーゼル機関車。側面の固いドアをギーッと開けると梯子を下りて来た機関士さんがこつちやこつちや！ と言つて片腕にひよいと僕を抱き運転台に担ぎ上げた

「しゅっぱーつ、進行！ 三十秒延ー！」

背後からのゴツツという響きとともにお腹の底から燃え上がるような機関車の鼓動が伝わる。後ろから、貨車が引き延ばされてガチャガチャと連結器の打ち付ける音がこだまする

「この汽車あな、二時四十五分に長沼出るんだ。米沢まで行く貨物だあ。勢至堂は、ほら、」ざい「だから二時三十八分逃したらもうねえ、乗れんかったらおれん汽車乗つてけえ、校長先生には内緒だあ！」

煤まみれの唇を開き白い歯がにっと思いた

「あんつあ、おらほを、ざい「だ？」

我が村を「田舎だ」呼ばわりされて良い気はしなかつたが、とにかく助かつた

「えばなあ、通過！ ホームよおし！」

機関車はますますガタガタと震え出し、間もなく貨物列車は山肌にぼっかり口を開けたルーフトンネルへ

前灯の灯りにうつつすら浮かび上がるレンガ積み黒く煤けている。父から昔聞いたことがあるこの江花のルーフトンネルは明治の頃にできたんだと。日本の国が中国やロシアと戦争をしていた頃のトンネルなんだと。ディーゼルの振動が鳴り響き、声を発しようにも何も聞こえない闇の中、ふと見上げると、機関士のおじさんの短い顎鬚が、行路表の小さな豆電球に照り映えている。ああその大昔にも、この暗闇を汽車は登つていったのだらうか

遠く明かりが近づき、貨物列車は山の中腹の線路へ飛び出した。眼下に江花川の流れが西陽を受けて輝いている。さきほど走つて来た線路を辿ると、後方遠くに長沼の町が霞んでいた

まもなく貨物列車はエンジン音を少しばかり落とし、足取りを速めて薄暗い日陰の山へ入つて行った

「せいしどう、ていちゃーく！」

単線の線路が二つに割れ、はるか前方再び合流する地点に真っ赤に光る停止信号が灯る。ギギギーッと金属が擦れ機関車の巨体がひねり出すようなブレーキの音と、後ろからガチャガチャと騒ぐ貨車の賑やかな音とともに、午後三時ちょうど、汽車は山あいの停車場に到着した。プシュー——と抜けるブレーキ管の音はそのまま僕の張りつめていた緊張を取り去っていく

「あんつあ、ありがとう！」

おらよつと僕を抱えて運転台から飛び降り、初めて制服の帽子を目深に被り直して「敬礼」の手を添えて崖下の駅舎に目を遣る機関士のおじさん。駅の改札の小さな柵越しに、大きく手を振る母の姿があつた

